

聞き書きを通じた世代間交流の可能性
— 「聞き書き甲子園」の事例検討を通して

石 村 華 代

VISIO No.45

九州ルーテル学院大学
Kyushu Lutheran College

December 2015

聞き書きを通じた世代間交流の可能性

— 「聞き書き甲子園」の事例検討を通して

石 村 華 代

Possibilities of Intergenerational Communication
through 'Foxfire in Japan'

Kayo Ishimura

はじめに

かつて、日本の社会には、老年者と子どものあいだに豊かな結びつきがあった。例えば、宮本常一は、自らの郷里である山口県・大島を舞台として『家郷の訓』という作品を書いている。そのなかで、祖父の肩みをする代わりに昔話を聞かせてもらったことなどを回想している。また、外祖父は講談が好きで、歴史上の人物に関する逸話を聞かせてもらったと述べている。このようなエピソードには、道徳的な教訓が含まれているのが常であった。例えば、毛利輝元がご飯に汁をかけ直したのを見て、元就が息子には大将としての器がないと判断したという話があった。宮本は幼い頃この話を繰り返し聞かされたそうだが、そのさいには「一度やりかけたことは中途で変更するものではない」という道徳的なメッセージが必ず外祖父から添えられていた〔宮本1984：33-43〕。このように、老年者から子どもへ、口から耳への伝承を通じて、多くの道徳的なことからは、自然に、物語の形式をとって、楽しみながら学ばれていたのである。

子どもの徳育に関する懇談会報告「子どもの徳育の充実に向けた在り方について」等でも言われているように、核家族化などによって、親以外の大人、とりわけ祖父母による子どもへの日常的な働きかけの機会は減っている。また、地域社会においても、都市化の進行とともに、老年者が近所の子どものと接したり、子どもに語り聞かせたりすることも少なくなったし、情報源が多様化した現代社会においては、子どもがかつてのように胸を踊らせて老年者の語りに耳を傾けることもなくなった。このことは、家庭や地域社会における文化継承が行われにくくなったことを意味している。自然な世代間継承が困難になった現代においては、したがって、学校教育や社会教育のなかで、そのような場を人工的に創出せざるをえないのである。

本研究では、文化継承に関する新たな取り組みとして、社会教育活動である「聞き書き甲子園」に着目する。論者はかつて、若者が老年者にライフストーリー・インタビューを行う意義について理論的に究明した〔石村 2011〕。そのさい、実践的な次元でその意義を明らかにすることが次の課題であると思われたため、本研究に着手した。「聞き書き甲子園」においては、若者が老年の名人に対して、仕事に焦点を当てた聞き書きを行うことを通じて、同時に、名人のライフストー

リーが若者に明かされることになる。これから、「聞き書き甲子園」の活動概要等を説明したうえで、名人と高校生が関わる具体的な場面を取り上げ、その活動の意義を明らかにしていきたい。

I 「聞き書き甲子園」について

1) 概要及び理念

「聞き書き甲子園」は、2002（平成14）年に「森の“聞き書き甲子園”」として、林野庁と文部科学省の共同事業として始められた。現在は、農林水産省、文部科学省、環境省、公益社団法人国土緑化推進機構、社団法人全国漁港漁場協会、全国内水面漁業協同組合連合会、NPO法人共存の森ネットワークが「聞き書き甲子園実行委員会」を結成し、企業の協賛・協力のもとで実施している。また、2010（平成22）年度以降、海・川の名人からの聞き書きも行っているため、2011（平成23）年度より「聞き書き甲子園」にその名称が変更されている。

「聞き書き甲子園」の目的は、「日本だけでなく地球環境にとっても大切な森や海・川を守り育てていくとともに、地域の生活様式・文化・伝統・技能等を次の世代に引き継いでいくために、今まさに忘れられようとしている農山漁村の暮らしや埋もれかけている生業や技等を語り」⁽¹⁾ 継ぐことである。また、「聞き書き甲子園」は、アメリカ・ジョージア州の高等学校で1967年より実施され、全米に普及しているFoxfire⁽²⁾を応用して開発されている。このことから、この事業が、教育活動に口承（オーラル・ヒストリー）を取り入れようとする国際的な動向にも影響を受けていることも分かる。

2) 聞き書き甲子園の実施スケジュール

「聞き書き甲子園」に参加する高校生の年間スケジュールは次の通りとなる。

- 5～6月：応募（身近にアドバイザーが必要であり、通常は、その生徒が通う高校の教員がアドバイザーを担当する。）
- 7月下旬：参加者決定（参加希望者が定員の100名を超えた場合は作文審査が行われる。）
- 8月中旬：聞き書き研修会（3泊4日）への参加
- 10～11月：1回目の名人への取材→取材記録の書き起こし
- 11～12月：2回目の取材→取材記録の書き起こしとレポートのまとめ
- 1月：レポートの締め切り
- 3月下旬：フォーラムへの参加、聞き書き修了証書の受け取り

8月の研修会では、森林体験プログラムなどとともに、聞き書きの講習・実習が実施されており、生徒はそこで聞き書きの方法等について学ぶ。聞き書きの指導は、作家の塩野米松氏⁽³⁾とこの活動の卒業生によって行われている。以下では、研修会で配布された資料をもとに、聞き書きの特徴と方法について説明する⁽⁴⁾。

聞き書きとは、「相手に話を聞きながら、その話し手の言葉だけで文章をまとめて」いく手法である。「語り」は語り手が「自分の意志だけで自分の人生などを」話す行為であるのに対し、「聞き書き」は語り手と聞き手のやりとりによって進められる行為である。よって、聞き書きとは、

語り手から「返ってきている答えの中に聞き手の姿が浮かび上がって」くるような、「聞き手の人生も反映している文芸形式」だといえる。

聞き書きを行うさいに、生徒は、まず、名人の仕事についての調べ学習を行っておく。「聞き手が何も知らなすぎると、話し手は相手との会話に興味を持たなくなるから」である。また、聞き書きの前には必ず、調べた知識をもとにして質問事項を用意しておく。当日の聞き書きでは、もちろん話の流れに応じて、用意した質問事項以外の内容も尋ねることになるが、あらかじめ何を聞きたいかをはっきりさせておくことは必要である。また、異世代の初対面同士のやりとりでは、話が途切れることもしばしばである。語り手からことばを引き出すためには、聞き手が語り手に対して自分のことを知ってもらえるように働きかけることも大切である。聞き手が語り手に対して自己を開くことによって、徐々に打ちとけた関係が築けるようになり、よそゆきでなく、自然でやわらかいことばが交わせるようになるのである。

聞き書きを終えたら、生徒は、録音したやりとりを一言一句もらさずに書き起こす作業を行う。当然、手間はかかるが、やりとりを丁寧にたどり直すプロセスを経ることで、名人への理解が深まり、名人の仕事とその人生をレポートとしてまとめたいという意欲がわくようになる。

レポートをまとめるさいには、読み手を意識する必要がある。よって、レポートを「読みやすく、人柄が良く見え、人生の裏側まで読み取れるものに」する工夫が求められる。あくまで語り手のことばだけでまとめるので、聞き手のことばはすべて省く。また、語り手のことばについても、癖で繰り返されることばや、仕事(=レポートの課題)との関係が薄い話題などは、「植木屋さんと同じく刈り取り」の作業をする。そして、読み手の興味をひくように並べ替えたり、読みやすいように小見出しをつけたりして完成させる。なお、このようにしてまとめられたレポートは、3月に行われるフォーラムで発表されたり、「作品集」という形で出版されたりする。

以上のような流れで行われる「聞き書き」では、相手の話を聞きたいという聞き手の関心や意欲が大きな原動力になる。「聞き書き12の心得」[代田ら 2012]には、以下のような心構えが挙げられている。「文才ではなく、素直さと尊敬する気持ちが大切」「個の尊厳を認めよう」「『聞き書き』は、人との出会いから始まる」「『話し手』と『聞き手』の思いが響き合って、ひとつになる」⁽⁶⁾などである。つまり、聞き書きに最も必要なのは、人と出会い、その出会いから学ぼうとする積極的な姿勢である。他者と出会い、そのことばに耳を傾け、まずは寄り添ってみようとする意欲や態度が聞き書きには求められるし、またそういった力が聞き書きを通じて養われるのである。

3) 先行研究の検討

「聞き書き甲子園」は、日本を代表するオーラル・ヒストリー・プロジェクト⁽⁶⁾として注目を集めている⁽⁷⁾。そのため、これに関するいくつかの研究がすでに行われている。

例えば、梅崎[2011]では、他人のキャリアに関するインタビュー調査が、キャリア教育の観点から有効だと指摘している。ただし、「このような授業の運営方法に関しては、授業担当者間で情報やノウハウが共有されているとは言い難く、教育者本位の授業が行われている可能性もある」[梅崎 2011: 95]と述べ、「調査対象との関係づくり、インタビュー調査法の教育、語りの編集方法について数々の実績を積み上げてきた」[梅崎 2011: 97]「聞き書き甲子園」の実践を高く評価し、紹介している。

また、石井克佳は、高等学校農業科の教員として、NPO法人共存の森ネットワークと連携し、

2年次「環境創造」の授業で聞き書きを行い、その成果を報告している[石井 2011]。それによると、この授業を通して言語活動への効果が見られ、キャリア教育の基礎的能力が高まったことが示されている。また、この研究では、学校の教育課程の枠内で生徒たちが聞き書きを行ったことが特徴的である。授業時数の制約や他の授業との兼ね合いなどを考慮して、個人ではなくグループで聞き書きをしたこと、事前学習(2日)・農山村調査(1日)・事後学習(1日)・発表会(1日)のスケジュールで行ったことが、社会教育活動である「聞き書き甲子園」とは異なっている。とはいえ、この実践及び研究は、学校教育においても工夫次第で聞き書きが実施可能であることを明らかにしている⁽⁸⁾。また、2012年にはこの高校の生徒がインドネシアに行き、現地の高校生とともに村落の聞き書き調査を行っていることから分かるように⁽⁹⁾、高校教師たちは聞き書きの活動に手応えを感じ、それを発展的に継続させている。

「聞き書き甲子園」については以上のような先行研究があるが、そこでは、この活動の意義をキャリア教育の観点から明らかにしたり、学校教育への応用可能性を模索したりすることに焦点が当てられていた。一方、本研究では、名人と高校生が関わる場を丹念に記述していくことによって、より具体的に、この活動のただ中でどのような出会いが生じているのかを明らかにしていく。

II 聞き書き場面における対話の様子とその考察

実際の聞き書き場面でどのようなやりとりが生じたのか、またそのやりとりからどのような意味をくみ取りうるのかを明らかにするために、ここでは、高校生が茅葺き屋根づくりの名人を訪問しその聞き書きを行った事例を検討する。

1) 方法

名人との二回にわたる会話を高校生に録音してもらい、その後、発表者が録音データにもとづいて会話記録を作成した。なお、名人はご高齢で耳が聞こえにくいこともあり、聞き書きは名人の妻との三者で進められた⁽¹⁰⁾。また、発表者は高校生に対して2回の面接を行った⁽¹¹⁾。当該研究活動の実施については、NPO法人共存の森ネットワーク、高校生とその所属先の学校長、名人のそれぞれに承諾を得ている。また、本論文の公表に先立ち、それぞれに内容の確認を行ってもらっている。

2) 内容と考察

会話記録から2つの場面を抽出し、考察を行う。なお、名人についてはHさんないしH名人、高校生についてはAさんと表記する。

○場面1：1回目インタビュー

Aさん：職業を教えてください。
 H名人：職業？職業は今ほだいたい無職たい。
 Aさん：無職ですか。
 H名人：だいたい。もう朝は5時から起きてがまだす*。
 Aさん：5時に起きて何するんですか。
 H名人：大根ひきしよるね。
 Aさん：じゃあ、名人て呼ばれてることを教えてください。名人て呼ばれてることを・・・
 H名人の妻：切りかけ大根たい。
 H名人：名人ねえ。切りかけ大根、切りかけ大根が一番、名人だろうねえ。別のもんはえらい
 できんもん。
 Aさん：はあ。 ※「がまだす」は方言で「精を出す」という意味。

Aさんは、Hさんについて、茅葺き屋根づくりの名人だと事前に聞かされている。Aさんは、H名人の自宅を訪問し、氏名、生年月日、出身地、家族構成を尋ねたあとに、仕事についての質問をするため「職業を教えてください」と言った。それに対してH名人からは「職業は今ほだいたい無職たい」という返答があった。この流れでは仕事の話聞き出すことができないため、Aさんは「じゃあ、名人て呼ばれてることを教えてください」という質問に切り替えた。すると、H名人の妻が「切りかけ大根たい」と述べ、H名人も「切りかけ大根が一番、名人だろうねえ。別のもんはえらいできんもん [注：方言で「たいしてできない」という意味。]」と応えた。Aさんは、Hさんから茅葺き屋根の話詳しく聞こうと考えていたのだが、切りかけ大根以外のことは大して立派にできるわけではないと言われ、困惑をしている。

〈考察1〉

H名人は、茅葺き屋根づくりには現在携わっておらず、息子と孫がその仕事を受け継いでいる。よって「だいたい無職」と述べたのだと思われる。ただ、H名人は、竹籠、切りかけ大根、わら草履などを製作し、その作り方を教える活動をしている。地域の祭りなどの世話もしている。また、田畑で野菜やそばなどの栽培も行い、「1ヶ月1万円くらいありゃあいい」というような、ほぼ自給自足の生活を行っている。そのため、80歳を過ぎた今も朝起きてから寝るまで身体を動かして働いている。したがって、特定の職業に従事しているわけではないが、「何かを作り出す、または、成し遂げる行動」[大辞泉]という、広い意味での「仕事」は積極的に行っている。

このような「仕事」観は、今や消滅しつつあるが、かつての農村にはごくありふれたものであった。村々では、農業を主体としながらも、日常に必要なものはたいてい自給する生活を営んでいた。竹やわらなどの加工はその典型である。また、この地域ではもともと、茅葺き屋根についても、専門の職人ではなく集落民が力を合わせてつくったり修繕したりしていた。かつて「農民は同時に職人でもあった。ほんとうの農耕に費やす時間は、全ての労働時間のうちの半分には達していなかったと思われる。そして自給度が高いほど誇りを持っていた」[宮本 1993: 92]のであり、また、村の寄り合いや祭りなども彼らにとっては「仕事」のうちに含まれていたのである。このような「仕事」は、産業社会における「職業」とは異質のものである。職業は一般に「稼ぎ」

のために行われる専門分化した活動であり、「稼ぎ」に直結しない活動や、あれこれと広範にわたって行われる活動は、現代では職業として認められない傾向にあるからである⁽¹²⁾。

高校生であるAさんは現代的な職業観にもとづいてH名人の職業を尋ねた。しかし、H名人の頭に浮かんだのは広い意味での「仕事」であった。よって「もう朝は5時から起きてがまだす」と述べ、早朝から精力的に働いていることを示唆した。そして、このインタビューはちょうど大根が旬の時期に行われたため、大根の収穫をしていることを伝えた。Aさんが表現を変えて「じゃあ、名人と呼ばれてることを教えてください」と言ったときにも、H名人とその妻は、その時期にちょうど行っていた仕事を思い浮かべたために、切りかけ大根の話題をもち出した。つまり、Hさん夫妻にとっては、周囲の環境との関係によって生じる当座の仕事に向き合うことが重要だったのだ。そして、その仕事に適切に対処するための技術をもっていれば、それは彼らにとっては名人芸であり、名人芸がいくつあろうともかまわないのである。柳田国男が指摘しているように、「職はそれぞれの技術に拠った生き方であるゆえに、多能な人ならば何度でも換えてよかった」〔柳田 1990:275〕のであり、しかもそれは数時間や一日といった、短い時間の単位で変化してもよかったのである。AさんがH名人からなかなか茅葺き屋根の話を開き出すことが難しかったのは、このような事情によっている。

なお、この部分の会話はAさんにも印象深かったようである。このインタビューの後、論者はAさんとの面接を行ったが、その際、Aさんは「ご自分で無職って言ってらしたので、今してることを聞こうと思って、現在の仕事とかについて2回目に聞きました」と述べている。この発言からは、AさんがH名人の言う「仕事」の意味が幅広いことに気づき、広義での「仕事」に即して2回目のインタビューを展開しようとした意思がうかがえる。

○場面2：2回目インタビュー

Aさん：茅葺き屋根では、あの茅葺き屋根ではどういう時に竹を使うんですか。

H名人：竹はだいたい、一番ふき始める前にね。下づくりだけん。それと今度は、だんだんに茅をふいて上るでしょ。そんなときもだいたい竹がいるとたい。それとふいて上るときにね、自分たちの足場を組んでかなね、だんだんにね。この間隔くらい、ずっと足場を組んでかないかん。

Aさん：茅葺き屋根は、じゃあ竹があつて茅があつて竹があつて茅があるんですか。茅葺き屋根。

H名人：だいたい実際、やっぱふきよるところをやっぱ見てみんと分からんたいね。

Aさん：紙ですか？

H名人：写真も見られた？

Aさん：前回、写真少し見ました。

H名人：見たろ。〈この後、15秒間沈黙〉

H名人の妻：これ食べよんなっせ。よかったらこれ。

Aさん：いただきます。

H名人の妻：おしょうゆつけて食べなっせ。

Aさん：食べました。おいしいです。〈この後、田楽の話題が続く。〉

H名人の妻：一番最初はほう、骨組みがこうあつてできるったいね。骨組み。家の骨組みがこう木でできるとたいね、これは。

H名人：そうそう、これでこん木の格好になつとるでしょ。そして、今度はね、今度はちょっとちょっと待ってよ。〈この後、茅葺き屋根の話題が続く。〉

Aさんが茅葺き屋根の工法についてH名人に尋ねている。H名人は、竹をふき始める前に下づくりとして竹を使うこと、また、竹で足場を組んで屋根を上っていくことを話した。Aさんは「竹があって茅があって竹があって茅があるんですか」と質問したが、H名人はその表現では不十分だと感じたため、「実際ふきよるところを見てみると分かんったいね」と応えた。とはいえ、H名人がAさんとともに屋根づくり現場に行き、その場で茅葺き屋根の構造について教えることは、物理的に不可能である。かといって、ことばだけでは説明しづらい。よってH名人は、紙に書いたり、写真を見せたりといった視覚的方法を補助として用いながら、Aさんに工法を伝えようとする。H名人が説明の仕方を模索している間、しばらく沈黙がつづく。だが、H名人の妻が「これ食べよんなっせ」と、机に出されていた田楽をすすめると、場の雰囲気次第に和らぐ。この地域の田楽には特別な種類の芋が使われていること、田楽のお店が何軒もあることなど、H名人も加わって、ひとしきり食べ物話題が活発に交わされる。そして、H名人の妻が、写真を見せながら家の骨組みの話題を切り出す。H名人もつづいて、工法——初めに^{さす}杖首と呼ばれる構造で木が組まれ、木材と木材の間に竹を格子状に並べ固定すること、竹の下地の上に茅束を並べて竹で押さえること、軒端は3回この作業を繰り返すことなど——を詳しく説明する。この後、職人技の見せ所や修繕の方法など、茅葺き屋根に関する話題が次々と交わされていく。

〈考察2〉

Aさんの質問に対して、H名人は「実際ふきよるところを見てみると分かんったいね」と返した。前後の文脈を抜いてこのことばだけを取り出してみると、ここで両者のコミュニケーションは一時、危機的状況に陥っていると思われる。茅葺き屋根に60年来関わっているH名人と高校生のAさんとの間にはその知識や認識に大きな差がある。よって、実地での経験をせずに会話のやりとりでその隔たりを埋めるのは困難だということが、この発言を通じて示されているのである。H名人は、このような状況を打開するために、図を書いたり写真を見せたりしてなんとか説明しようと試みる。しかし、H名人が「写真も見られた？」と尋ねると、Aさんは「前回、写真少し見ました」と応えたため、H名人は、写真を見せても上手に伝えられるかどうか分からないというように「見たる？」と返答する。この場面からは、会話が円滑に進まず、その場に居合わせた三人が共にもどかしさを感じている様子がうかがえる。

ところが、H名人の妻が田楽をすすめると、その場の空気が徐々に緩む。ここで話題が茅葺き屋根から田楽へと切り替えられたことについては、H名人の妻の、豊かな人生経験に裏打ちされた機転が感じられる。そして、このような機転はエリクソンのいう「祖父母の世代継承性 (grand-generativity)」[Erikson 1994: 74] の要素を含んだものとして捉えられる。それは、次の世代の人々を温かくいつくしみながら育てようとする心もちであり、前の世代から受け継いだものを次の世代へと渡そうとする働きかけのことである。この事例では、H名人夫妻にとってAさんは自分たちの孫よりも若い来客である。そのような来客が彼らの仕事や文化に関心を持ち家を訪ねてきたときには、おそらく、老年者のなかに、血のつながりをこえた、親世代のものとはちがった継承性が芽生えるのであろう。

このような祖父母的世代継承性は、この事例では、手づくりの田楽として具象化される。ここで、出された食べ物が手づくりだったこと、また、その土地固有のものだったことに注目したい。まず、手作りのものを差し出すためには、相手を迎え入れる前にその人のことを思い、丹念に準備をしておく必要がある。H名人の妻はAさんを迎え入れるにあたって、よその土地から来た人

には珍しい、地元の食材をつかった田楽を用意しておいた。Aさんを喜ばせようという思いから、H名人の妻はAさんのために手間暇かけて調理をしたのだろう。それに対して、このような心づかいを差し出されたAさんは、よろこんで田楽を口にし、その心づかいを受け取った。つまり、H名人夫妻の心づかいに対し好意をもって応答したのである。また、この田楽には地元特産の芋が使われている。日頃夫妻が口にしている食べ物をとることで、両者のあいだにつながりが生まれ、それをめぐることばが交わされる。食べ物人と人とを結びつけるメディアとしての役割を果たすといわれるが[加藤 1985]、ここでの田楽は、まさに両者の橋渡しをするメディアとしての意味を担ったのである。このようなやりとりを介して、H名人夫妻とAさんとのコミュニケーションはゆるやかに回復をしていく。そしてその後、H名人夫妻からAさんに、茅葺き屋根の工程が詳しく語られることになるのである。

おわりに

本研究では、「聞き書き甲子園」において、高校生と名人のあいだでどのような語り紡がれたのかに焦点を当てた。場面1では、名人夫妻が有する広い意味での「仕事」観と、高校生が有する産業社会的「職業」観が異なっているため、会話がなかなか進まなかったが、高校生が名人の言う「仕事」の意味が幅広いことに気づき、意思疎通が図られるようになったことを確認した。一方、場面2では、やりとりが一時うまくいなくなるが、名人の妻が手作りの食事を出し、高校生がそれを口にすることによって、コミュニケーションがゆるやかに回復していく状況を認めた。つまり、どちらの場面でも、一時的に世代などの差による「非親和性」が浮き彫りにされたのだが、場面1では高校生の気づきによって、場面2では食べ物を介して両者が「親和的な方向」へと舵を切っていく様子が描かれていた[石村 2011]。

コミュニケーションとは、他者の異質性があらわになる営みであると同時に、他者と「共通のものをつくり出す営み」[やまだ 1998: 3]である。「聞き書き甲子園」においては、異質性と親和性のダイナミズムのもとで、老年者から若者への文化継承が行われうることが明らかになった。また、聞き手である高校生が語り手である名人の仕事と人生に敬意を払い、語り手のことばに耳を澄まし、時をともに過ごすなかで、両者のあいだにつながりが生まれることが見て取れた。

本研究では、「聞き書き甲子園」という社会教育活動に焦点を当てて分析を進めてきた。まずは、社会教育活動における世代を超えた交流の意義を改めて確認したい。それとともに、学校教育においても両者の交流がより豊かになされるべきである。周知の通り、学習指導要領では総則において「高齢者などとの交流の機会を設けること」の必要性が認識されている。「高齢者に対する感謝と尊敬の気持ちをはぐくみ、高齢者から様々な生きた知識や人間の生き方を学んでいくことが大切」だとされており、道徳の時間や総合的な学習の時間などを通じて、各地で様々な教育実践が行われている。例えば、授業に高齢者を招いたり、福祉施設を訪問して話をしたり、伝承遊びを教わったり、介護の手伝いをしたりといった活動である。それらは、子どもたちにとって楽しく有意義な体験となることが多いようだが、一方、授業時数の制約等もあり、単発的なイベントにとどまってしまうがちになったり、系統性や計画性を欠いていたりすることもある。このような現状に対して、「聞き書き甲子園」の活動は、今後の交流をより意義のあるものにしていくさいの示唆を与えうる。今後、具体的な事例を質量ともに充実させながら、学校の教育活動における

「聞き書き」活動の事例研究を行うことなども試みていきたい。

注

- (1) 2012年8月11～14日「第11回聞き書き甲子園」研修会での配布資料より引用。
- (2) Foxfireとは、高校生が地域の人々のもとへ取材に出かけ、丸木小屋づくりやキルトづくりといった「地域の生活・職業に関する」[小川 1993: 17] 内容や、地域の人々の「自分史」を記事としてまとめ出版する活動である。ちなみにFoxfireとは、その地域に生育する「ひかりごけ」を意味する。
- (3) 作家の塩野米松は、『木のいのち木のこころ』[西岡ら 2005]などの作品を通じて聞き書きの名手としても知られており、この活動の当初より講師を務めている。
- (4) (1)と同様の資料である。
- (5) それぞれの項目には、例えば、「まず初めに挨拶をしよう。まなざしを交わし、なぜ会いに来たのかを伝える。まっすぐな真摯な態度で、あなたが向き合えば、『話し手』はきっと心を開いてくれる」「あなたが『話し手』に共感する気持ちが、作品を仕上げる原動力」などの解説が付けられている。
- (6) 日本ではオーラル・ヒストリーに関する「自覚的な取り組みは稀」[榎原 2010: 30]であり、また、「初等・中等教育におけるオーラル・ヒストリーについては、これまで目立った実践例はなく、研究としてもほとんど注目されてこなかった」[藤井 2010: 145]といえる。
- (7) 例えば、映画監督である柴田昌平は、「聞き書き甲子園」を題材として、以下のような作品を手がけている。映画『森聞き』（2010年公開）、ドキュメンタリー番組「森の賢者 海の哲人～高校生が出会った魔法の言葉」（NHK教育テレビにて2013年1月3日放映）。
- (8)他にも、島根県立吉賀高等学校では、筑波大学附属坂戸高等学校と同様に、NPO法人共存の森ネットワークとの連携のもとで、聞き書き活動が行われている。
- (9) ジャカルタ新聞2012年9月13日の記事を参照した。この記事のURLは以下の通りである。
<http://www.jakartashimbun.com/free/detail/1587.html>
- (10) 正確に言えば、名人の孫もごくわずかの間だがその場において会話に参加している。
- (11) 高校生に対する面接は、当初、各回の聞き書き後を予定していたが、スケジュールの都合上、1回目の聞き書き前と2回目の聞き書き後となった。
- (12) ここでいう「仕事」と「稼ぎ」の違いについては、内山節の説明を参考にしている[内山 1986][内山 2011]。

引用文献／主な参考文献

- 石井克佳 2011 「言語活動を充実させる森林環境教育の実践～聞き書きの手法を取り入れた農山村調査」、『筑波大学坂戸高等学校研究紀要』第48号, 65-80頁。
- 石村華代 2011 「若者による高齢者へのライフストーリー・インタビューとその意義—世代間共生に向けての一つの試み—」,九州教育学会研究紀要第38号, 55-62頁。
- 内山節 1986 『自然と労働—哲学の旅から—』, 農山漁村文化協会。
- 内山節 2011 『時間についての12章—哲学における時間の問題』, 岩波書店。
- 梅崎修 2011 「オーラルヒストリーを使った教育実践—『森の“聞き書き甲子園”』の活動」,「法政大学キャリアデザイン学会紀要 生涯学習とキャリアデザイン」第8号, 95-107頁。
- Erikson, E.H. Erikson, J.M. Kivnick, Q. 1994 Vital involvement in old age. Norton. エリクソン『老年期 生き生きした関わり合い』(朝長正徳, 朝長梨枝子訳), みすず書房。
- 小川浩之 1993 「アメリカの地域学習におけるオーラル・ヒストリーの研究—Georgia州RabunCountryにおける“Foxfire” magazineを事例として—」『筑波社会科研究』第12号, 11-23頁。
- 加藤秀俊 1985 「食の社会学」, 加藤秀俊ら『食の文化』, 講談社。

- 代田七瀬, 吉野奈保子 2012 「聞くこと・記録すること 『聞き書き』という手法」, SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ事務局・国連大学高等研究所製作.
- 西岡常一, 小川三夫, 塩野米松 2005 『木のいのち木のころ』, 新潮文庫.
- 藤井大亮 2010 「米国ジョージア州の“Foxfire”誌におけるオーラル・ヒストリーの変貌」『日本オーラル・ヒストリー研究』第6号, 145-167頁.
- 横原茂 2010 「オーラル・ヒストリーと教育」『鳥取大学教育学部研究紀要』第42巻別冊, 25-32頁.
- 宮本常一 1984 『家郷の訓』, 岩波書店.
- 宮本常一 1993 『日本民衆史6 生業の歴史』, 未来社.
- 文部科学省 『小学校／中学校／高等学校学習指導要領解説 総則編』
子どもの徳育に関する懇談会「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」
- 柳田国男 1990 「明治大正史世相編」『柳田国男全集26』, ちくま文庫.
- やまだようこ 1998 「身のことばとしての指さし」 秦野悦子・やまだようこ編 『コミュニケーションという謎』, ミネルヴァ書房.